

## 私たちの「表現の不自由展・その後」

### を開催して

高橋良平

「表現の不自由展・その後」をつなげる愛知の会

8月25日(木)から8月28日(日)にかけて、昨年と同じ市民ギャラリー栄で、昨年と同じタイトルである「私たちの『表現の不自由展・その後』」を全期間開催することが出来ました。

愛知県が全面的にバックアップするかたちの国際的な芸術祭で起きた、大規模な抗議行動とそれを受けての表現規制、しかもその作品内容が戦争責任や天皇制を含む作品群である以上、私たちに突き付けられた課題は、私たちの社会の根本的な歴史観や表現の自由の尊重といった、きわめて(戦後)民主主義の根本を構成する問題であったと思います。またトリエンナーレ 2019以降も、河村たかし名古屋市長が執拗に嫌がらせを行い、それが大村知事へのリコールやベルリンミッテ区への少女像撤去要求、そして名古屋市分担金不払いを起こすことにつながります。さらに、この一連の動きを極右勢力や差別主義者らが積極的に参加・活用したことは重要です。私たちに、歴史の事実の尊さ、表現の自由の尊さを突きつけるとともに、状況の変革はどうすれば可能なのだろうか?ということを問うたと思います。

今回の展示会は、昨年の「中止」問題が解決しないなかで、大阪での不自由展に関する施設利用を巡る最高裁判決が出たことによって可能となりました。行政は市民の表現する権利を守らないといけないことが裁判によって確定した意義は大きく、今年4月の東京、8月の京都、そして9月の神戸ともに公共施設で開催されていることに表れています。このような状況のなかで、名古屋での開催だけが「中止」のままでは、後味が悪く、映画で言えば「BAD END」のようなものです。なんとしても再開しなければと思いました。

私たちにとって非常に幸運だったことは、強力な弁護士2名が私たちとともに再開運動を行ってくれたことです。久野弁護士は昨年中止になった3日目にたまたま当番弁護士として(手弁当で!)当日その場に居合わせた時から、積極的に(手弁当で!)交渉などに参加してくださいました。また熊

本弁護士も、中止の報を聞いて、自ら駆けつけてくれたのです。まさに渡りに舟!(笑)。もとい、天使が空から舞い降りてきたかんじでした!!

上記弁護士2名の他にも、たくさんの知り合いや市民のみなさんの応援があって、今年の再開は実現出来ました。不慣れな運営や準備のため、反省点も多々多々ありますが、まずはこの場をお借りして、無事怪我も大きな問題もなく開催出来たことをみなさまにご報告申し上げるとともに、さまざまなご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

歴史の事実と表現の自由は、まだまだ回復にはほど遠いです。今回達成したことは、際限なき後退に一定の歯止めをかけることが出来た、ということだと主観的には判断しています。

これからのことですが、まずは展示会を総括し、会の今後をみんなで決めつつ、これまでの運動で出された課題にどう答えるのか、自ら模索していく考えです。

